

中国第一歴史檔案館所蔵の 中央アジア関連文書について

小 沼 孝 博

中国第一歴史檔案館（所在地：中国北京市）の「軍機処全宗」分類に属する文書群（以下、「軍機書文書」と呼ぶ）の中には、清朝時代の中央アジア地域に関する文書が豊富に残されている。これらの大半は、新疆駐劄の駐防官（將軍・大臣）と朝廷（皇帝・軍機処）の間を往復した行政文書で、18世紀（～乾隆朝）までは満洲語で記されたものが多く、19世紀以降（嘉慶朝～）は次第に漢語のものが増加する。本報告では、筆者の中国第一歴史檔案館における調査の経験に基づきつつ、「軍機処文書」中の中央アジア関連文書について紹介した。

「軍機処文書」の文書形態は、一枚物の文書と月別にファイリングされた冊子状のものとは大別される。前者は、現地に派遣された駐防官の上奏文（奏摺）を軍機処で複写・保存したものであり、近年「軍機処満文録副奏摺」として公開された。ただし、実際には奏摺以外に、対外勢力に対する勅諭や駐防官から皇帝を経ずに軍機処に直接送付された呈文を含み、漢文文書も少なくない。また、奏摺の本体は複写されたものだが、それに添付されている附件は原物であり、そこには中央アジア勢力の有力者が清朝側に宛てたチャガタイ語等の原文書も存在する。これによって、翻訳作業により清朝側の論理で潤色されてしまう前の、彼らの言説を知ることができるのである。一方、後者の冊子は、北京の朝廷内での政策協議に関するものである。「軍機処満文議覆檔」は皇帝が軍機大臣に審議を命じた案件の答申を、「軍機処満文上諭檔」・「軍機処満文寄信檔」は皇帝から駐防官に送られた命令文やカザフ・コーカンド勢力に対する勅文を日付順に収録したものである。以上の諸文書を総合的に利用することで、清朝の文書行政システム（＝政策の立案・決定・実施の過程）を復元でき、統治制度がどのような現地社会の事情、或いは政権側の意図・目的をふまえて導入されたのかを把握することができる。

次に、カシュガリア・カザフ・コーカンド関連の「軍機書文書」10件を実際に取り上げ、それらの内容と特徴について述べた。

カシュガリア（回疆）

① ホージャ＝シー＝ベク父子への事情聴取（満文）：

北京に移住させられたムスリム有力者が、ヤルカンド＝ハーン国後半のハーン系譜や諸都市のベクの種類について語ったもの。

② 清朝征服直後の職人調査 (満文) :

各オアシス都市における職人の種類・人数、及び征服前の徴税・管理体制に関する調査報告。

③ カシュガルのハーキムから参贊大臣への呈文 (チャガタイ文) :

1801年にカシュガルのハーキム職にあったイスカンダル王が、同地域のベク全60名と連名で参贊大臣フシюнに宛てた請願書。チャガタイ文で記されているが、清朝公文書の書式に整えられ、満洲語からの借語を多く持つ。当時の政治・社会状況を考察する上で第一級の史料。

④ 「葉爾羌大小伯克履歷冊」 (満文) :

1818年に作成されたヤルカンド=オアシス所属のベク 54名 (定員は56名) の履歷。ベク個人・一族の歴史の復元にも大きく寄与する史料である。

カザフ

⑤ アブライの「投誠表文」 (オイラト文) :

1757年(乾隆22)に清朝に投誠した際の表文。漢文編纂史料中のものと大きな相違が見られる。

⑥ 宣撫使ヌサンの報告 (満洲文) :

アブライのもとに派遣された使臣の活動報告。かなりの長文でアブライの言動やカザフ社会の観察が興味深い。

⑦ 「満文哈薩克檔」 (満文・漢文) :

4冊の冊子からなる文書群。乾隆年間(1735-1795)におけるカザフの朝貢使節の派遣時期・人員構成、清朝の迎接方法を伝える。

⑧ ハーン=ホージャからの来文 (チャガタイ文) :

カザフの有力者ハーン=ホージャがタルバガタイ参贊大臣に宛てた文書。

⑨ アブライからの来文 (チャガタイ文) :

1778年に内附を求めたアク=ナイマン部のカザフ人を清朝がアブライに返還した際の返書。当時の清朝-カザフ関係を探る上で興味深い記述を含む。

コーカンド

⑩ ナルバタ=ビィからの来文 :

1795年にナルバタ=ビィからの使者が帶來した書簡群で、カシュガルの参贊大臣とハーキム、及びヤルカンドのハーキムに宛てた3文書からなる。このうち、ヤルカンドのハーキムに宛てた文書は、書式等から判断して清朝領内で作成された可能性が高い。本報告で取り上げた上記の「軍機書文書」は、清朝のカシュガリア=オアシス支配の実態、及びカザフ・コーカンドとの関係を解明していく上で極めて重要な情報を含んでいる。今後は、これらの諸文書を歴史学研究に利用していくことが課題となろう。

(日本学術振興会特別研究員, 筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)